物質文化に語らせる「中国」文明の歴史

西江 清高

歴史記述の重要な方法の一つとして、通史がある。中国の歴史をあつかった通史は、近代以降、中国国内ではむろんのこと、日本をふくむ諸外国においても、さまざまな立場の歴史家や中国研究者の手によって、時代の思潮や学界の動向を反映した作品が著されてきた。近年の日本でも、中国史の全体をあつかった本格的な通史として、山川出版社『世界歴史大系　中国史一―五』（松丸道雄他編、一九九六―二〇〇三年）や、講談社『中国の歴史一―一二』（礪波護他編集委員、二〇〇四―二〇〇五年）など、影響力のある作品の出版があいついでいる。本欄で紹介する稲畑耕一郎監修・劉煒編『図説中国文明史一―一〇』（創元社、二〇〇五―二〇〇七年）も、そうした中国通史の一つに数えられるものであり、その比類を見ないユニークな内容構成は、中国史に限らず、広く通史という歴史記述のあり方に新風を吹き込む作品として注目される。

本書のユニークなところは、その書名に端的に表れているように、中国の全史を壮大な一つの「文明史」として捉え、文明を一面において支えた物質文化に関する圧倒的な量の画像資料をもってそれを「図説」したことである。なるほど過去にも考古学的な発見物を図や写真で紹介したり、史跡や歴史的事件の写真を効果的に採用した中国史の著作は存在した。しかしその多くは、画像資料を本文叙述の理解の一助として副次的に利用するというものであった。ところが本書においては、画像資料それ自体が主役となっている。正確に言うと、画像の形式で提示される物質的資料、すなわちモノ自身が本書の主役であり、モノに時代を語らせる、というのが本書の基本的な狙いとなっているのである。

本書の成り立ちはやや複雑である。本書には中国語の原著が存在しており、したがって本書はその邦訳書であるということができる。しかし、その日本語訳にあたっては、原著にある大量の画像資料とそこから語られる的確な時代解説をそのまま活かしながらも、画像や解説文の配置あるいは画像の見せ方に、原著にはない工夫をこらし、本文中には訳者たちによって追加執筆された豊富な「コラム」や注釈文をちりばめ、そのうえで日本語版の監修者によって入念に準備された各王朝史の総括を各巻序文として用意している。これらによって、原著においてやや脆弱にもおもわれた歴史の全体像を俯瞰する通史としての統一的な構成を、より盤石のものに近づけようとしているのである。

本書のもとになっている原著は、劉煒氏を主編者とする『中華文明伝真一―一〇』（商

稲畑耕一郎監修／劉煒編
図説中国文明史（全一〇巻）
A5判変型　平均 288頁
［1·2·3·6·7·8·9巻 3675円］
［4·5·10巻 3360円］ 創元社

務印書館・香港、二〇〇一年）で、日本語版の『図説中国文明史一―一〇』では稲畑耕一郎氏が監修をおこなっている。日本語版各巻のタイトルと原著の著者および訳者はつぎのようである。

①趙春青・秦文生著（後藤健訳）『先史　文明への胎動』（二〇〇六年一一月）
②尹盛平著（荻野友範・崎川隆訳）『殷周　文明の原点』（二〇〇七年二月）
③劉煒・何洪著（荻野友範訳）『春秋戦国　争覇する文明』（二〇〇七年五月）
④劉煒著（伊藤晋太郎訳）『秦漢　雄偉なる文明』（二〇〇五年九月）
⑤羅宗真著（住谷孝之訳）『魏晋南北朝　融合する文明』（二〇〇五年一一月）
⑥尹夏清著（佐藤浩一訳）『隋唐　開かれた文明』（二〇〇六年八月）
⑦杭侃著（大森信徳訳）『宋　成熟する文明』（二〇〇六年三月）
⑧杭侃著（表野和江訳）『遼西夏金元　草原の文明』（二〇〇五年五月）
⑨王莉著（児玉弘一郎訳）『明　在野の文明』（二〇〇六年九月）
⑩陳萬雄・張倩儀著（川浩二訳）『清　文明の極地』

各巻には最も少ない巻（『清』）で三六四点、最も多い巻（『殷周』）で四六五点にのぼる図版が掲載され、巻末にはすべての図版の出典や資料の所蔵場所などのデータが付せられる。巻末にはまた、簡潔ながら周到に用意された年表・索引・日本語参考文献が付載される。

これら一〇巻の一つひとつを紹介することは本評の目的ではないし、そもそも評者にそのような力量はない。しかし、本シリーズの特色と主張するところを理解するためにも、各巻巻頭の稲畑耕一郎氏による監修者序文と、各巻本論の内容を、以下にごく簡単に紹介しておこう。

①『先史』巻序文で稲畑氏は、新石器時代の中国大陸には「文化の地域的特質というものの核は胚胎されていた」という多元論を述べ、その最終局面で古代文明が「中原」において誕生したことを説明することが考古学の課題とする。また、文明形成への新石器時代の道程において、ユーラシア東西間の連鎖的な刺激があった可能性を指摘する。最近の考古学研究では等閑視されがちな視点であるが、「中国」文明の変容と発展の原動力の一つに、ユーラシアの諸地域を巻き込んだ人と文化の交流・衝突・融合があったとするのは、

中国文学研究文献要覧
古典文学1978～2007
▼川合康三　監修　B5・790頁　定価42000円（税込）　7月刊
1978～2007年までに国内で発表された中国古典文学研究に関する単行書4千件、図書掲載論文2千件、雑誌記事1・7万件の情報を収録。

読書案内　中国を知る本
「政治経済」「歴史」「文化」の分野別に各々重要なテーマ200項目の解説と関連文献リスト各8千点を収録。
①政治・経済―13億人の今　▼定価8400円（税込）　5月刊
②歴史―4000年の繁栄と興亡　▼定価8400円（税込）　6月刊
③文化―四書五経から美術・音楽まで　▼定価8800円（税込）　7月刊

日外アソシエーツ
東京都大田区大森北1-23-8
TEL.(03)3763-5241　FAX.(03)3764-0845
URL：http://www.nichigai.co.jp/

本シリーズの基本的主張の一つとなっている。本巻の大きな特色は、先史時代の道具の使用法とそこから窺われる狩猟採集民、初期農耕民の生活文化を掘りさげて述べている点であろう。意外に思われるかもしれないが、こうした道具の使用に関する記述は、多くの考古学専門書では欠落している内容であり、考古学とは異なる角度から物質文化に光を当てる本シリーズの特徴とも言えよう。本巻では化石人類についても多くの紙数を割いているが、人類進化における中国大陸の独自性を強調した多地域進化説への共感には、やや戸惑いを感じる読者もあろう。また最終章で、国家の誕生としてあつかわれる二里頭文化については、もうすこし記述に厚みがあってもよかったと思われる。

②『**殷周**』巻序文では、中国文明の継続性を支えた原理の核として、「殷代に確立した文字体系と周代に整備された礼制」を位置づける。本論各章では、殷王朝、西周王朝の政治・経済・軍事・生活文化の多岐にわたるテーマを取り上げ、圧倒的に豊富な遺跡や出土遺物の事例を提示して解説し、それらの実相を浮彫にしようとする。

③『**春秋戦国**』巻序文では、この時代を「中国史の中でも唯一の真の『百花斉放』の時代」であり、それゆえに「多くの可能性の選択肢があった」時代と評する。本論は、そうした緊迫した時代の空気を、「ありのまま」の出土資料や遺跡の解説を通じて読者に語りかけようとする。第二章「軍拡競争の激化」では、武器類の出土資料や戦国都市遺跡の解説から軍拡の時代の諸相にせまり、第三章「鉄器時代の経済の大発展」では農具・工具・貨幣・手工業工芸品の出土資料を解説して、商工業発展の過程を生きいきと描きだす。本巻と次の『秦漢』巻は、本シリーズ原著の主編者劉煒氏が執筆を担当していることもあり、シリーズの狙いが最も鮮明にされていると言えよう。

④『**秦漢**』巻序文では、秦漢帝国の出現によって「一つのまとまりある世界」としての「中国」が誕生したことをのべる。その世界はやがて、「底流には常にあるべきひとつのまとまりたらんとする『統一』への求心力」をもつものとなり、その理念としての中国は、始皇帝以後「ここに為政者たらんとするものたちに受け継がれた」とする。本論各章の大きな特徴は、近年出土資料が増加している秦について多くの紙数を割いていることであろう。第一章では春秋戦国以前に遡る秦の勃興から始皇帝の死に至るまでの過程を、各時期の首都遺跡と陵墓の様相から明らかにし、第二章では四〇頁以上を費やして始皇帝時代の軍事的側面を詳論する。また、第三章では秦律や度量衡資料などから秦の諸制度についてまとめる。第四章以降の漢に関する記述をふくめて、出土資料に依拠しながら、これほど豊かな内容を描きだした原著者の手腕を評価したい。

⑤『**魏晋南北朝**』巻序文では、この時代を、漢代に完結された古代的枠組みが社会の変化に十分に対応できなくなった結果として生まれた分裂・動乱の時代と評したうえで、この「苦難に満ちた時代を通過しなければ、中華の文明は相当痩せ細ったものとして終わっていたにちがいない」と論ずる。本論各章では、この時代の顕著な出土資料でもある大量の陶俑や墓の壁画資料を多用して、軍事・社会生活・政治制度などにせまる。また、石窟彫刻や仏教絵画についても通史の枠をこえた緻密な解説をくわえている。これらを通じて、江南と華北との南北関係はむろんのこと、内陸アジア・東アジア各地の動向にも注意を向けた多元的な文化の展開を論ずる。

⑥『**隋唐**』巻の序文で稲畑氏は言う、「唐初には人口も少なく、驚くべきことに、塞外の地から中原に移民が実施されたほどで

ある。来るものが拒まれる理由はどこにもなかった。それが『大唐の気風』を作り出した土壌である」、と。しかし同時に、胡風横溢する文化、女性たちの輝きなど、かつて日本人が憧れ、ときに中国の原点とも見なされてきたこの時代は、じつは「長い中国の文明史の中に置いてみると、はなはだ非伝統的なものであった」と論ずる。本論は、第一章の二〇頁をこえる長安の都の日々の生活誌にまで及ぶ詳細な記述から始まり、多種多彩な出土品の数々と重要史跡の紹介を通して、「開かれた文明」の輝きを活写する。通史としてみたとき、事件史や制度史に関する記述がいかにも手薄な感じはあるが、その点で本書を批判するのは的はずれであろう。

⑦『宋』巻序文では、この時代を「内向の時代」、「精神性の深化が図られた」時代、「文弱」の時代と評する。唐代との対比は鮮やかであるが、序文と本論の全体を通じて見ても、唐から宋への変動期に関する記述には曖昧な印象がのこる。ただし、遼・西夏・金・元を扱う次巻の序文で、「北の世界からの一種の破壊的な力が作用したところが大きい。従って、それがなければ、文化史上にいわれるところの『唐宋の変革』なるものもありえなかったろう」とする監修者の総括が述べられている。『宋』巻本論では、この巻から、墓の壁画以外の伝存する絵画資料が多くあつかわれるようになり、それをもちいた絵画の読み解きと、諸情景の記述は、歴史のひだに深くわけいるような趣がある。

⑧『遼西夏金元』巻序文では、中国の歴史を、「中国大陸」という「共同幻想のような地域」において継起したものとして見るのではなく、広くユーラシア大陸の諸地域を巻き込んだ壮大な動向の一部としてとらえる視点を重視すべきとする。その上でこの時代の文明史的特質を、重商主義的な社会と農本主義的な社会の邂逅として説明しようとする。本論第三章第四節の冒頭では、「かつての歴史観では、当時中原の漢族が侵略をうけた点に焦点をあわせ、その民族融合については、開放的な唐朝にたいするような高い評価は見られ」なかったと述べられる。ここに明らかなように、本巻の基本的な姿勢は、出土資料、絵画資料を駆使して、まずは統治者となった諸民族の視点から、諸民族の文化と社会制度の特徴を解き明かし、その上で漢文化との接触と融合の諸相を描きだそうとするものである。しかし同時に、「漢族を中心とする多民族共同体の形成」に向かったとするこの時代への評価については、さまざまな受けとめ方がありうるかもしれない。なお原著者の専門を反映して、古建築・科学技術・宗教芸術に関して、諸他の通史的著作には見られない手厚い解説がなされている。

⑨『明』巻序文で監修者は、日本人にとって具体的なイメージをもちにくいように感じられる明代ではあるが、と前置きして、実はこの時代に生みだされた『三国志演義』『水滸伝』『西遊記』を通して漠然とイメージされてきた「伝統中国」とは、「秦漢でもなく唐宋でもなく、正確には明という時代のそれである」と喝破する。そしてこれらの作品の存在こそ、この時代の「文明の大衆化・世俗化・商品化の象徴でもあった」とつづける。ただし、残念ながら本論各章においてはそうした庶民文化を伝える記述が十分とは言えない。むしろ皇帝とその周辺の人々、および政治制度に関する記述が中心となる。これに原著者の専門である軍事・戦略面に多くの紙数を割き、同時に本シリーズに共通する科学技術や宗教史に関する画像資料を用いた記述を満載する。

⑩『清』巻序文で監修者の稲畑氏は、異民族政権として始まった清というフィルターを通して、現代のわれわれは過去数千年の中国文明を違和感なく見てきたと言うべきである

が、しかし、「考えてもみれば、この地の長い中華の文明は、つねにそのようなものとして、自在に変容を重ねながら今日まで受け継がれ、拡大発展して来たのである」と述べて、本シリーズ最終巻の序文を結ぶ。『先史』巻の序文以来、監修者が一貫して強調する中国文明史観の重要な一側面は、「中国」というものを、ユーラシアの諸地域・諸民族の動向とともに常に変容を繰り返してきたことを念頭において見ていく姿勢であろう。『清』巻本論では、この巻ではじめて、当時撮影された貴重な写真資料の数々が効果的に用いられている。採用された写真資料や絵画資料の質と量は、一般的な通史的著作には前例がないほどのものであり、「歴史を体感する」という表現がふさわしい内容となっている。ところで本巻中に考証学という項目が見あたらないので調べなおすと、前の『明』巻に顧炎武の名があった。そこでは顧炎武の肖像を取り上げて、かれの学問・思想ではなく、当時の知識人の身なりについて解説している。本シリーズの面目躍如と言えようか。

全一〇巻のシリーズを通読すると、本書の叙述のスタイルが、王朝史のスタイルをとっていることがわかる。王朝ごとに区分した叙述のあり方を、あるいはやや古いスタイルの通史とみなす向きがあるかもしれない。しかし、本シリーズに見て取れるものは、変化に乏しい王朝交替史観のそれではなく、各王朝の歴史上の個性を浮彫にしようとする意図であり、移りゆく各時代に固有の諸相を掘り下げていく姿勢である。本シリーズの多くの巻では、各王朝の支配層を構成した人々（民族）とその文化について、それぞれの源流に遡って記述を始め、中国の諸王朝が本来多元的な源流をもつことを鮮明にしている。

原著の執筆者も、また監修・翻訳をおこなった日本側執筆者の多くも、歴史学研究の専門家であるよりも、文学、思想、芸術、考古学、文化財研究等々の分野で活躍する研究者である。そうしたいわば通史の著者としては異色の顔触れによる協同作業であるがゆえに、本シリーズはある種の新鮮さに溢れた作品となっていることが感じられる。おそらく各時代を専門とする歴史学者や考古学者のなかには、本書を手にして、さまざまな細部について異論を唱える人があるかもしれない。実際、考古学が専門である評者にしても、『先史』や『殷周』巻の中にはそう感じられる部分も少なくない。またもし通史というものが、本来「スタンダード」な歴史記述を目指すべきものとすると、本書にはときにそれを逸脱したような部分が散見されると評する人があるかもしれない。しかし評者はそのことをことさら問題にしようとは思わない。むしろそれは各執筆者の個性が十分に発揮されたことの結果である。異論はありえても、従来の通史が等閑視した内容に踏み込んだ記述が随所に見られる本シリーズには、それゆえの力強さが溢れていると言えよう。

誤解をおそれずに言うならば、本書の読者は、すばらしく完備された歴史博物館に案内されて、そこで博識きわまりない専門家から蘊蓄を傾けた解説をうけるという、実際には実現しそうにもないことを、本書の中で体験することになろう。本シリーズが一般にスタンダードとされている中国通史とは趣を異にすることを理解していただけるならば、中国の歴史に関心のあるすべての人たちと、中国のみならず、物質文化とそれに基づく文化史的構築の実践に関心のあるすべての人たちに、本シリーズ諸巻を推薦したい。

（にしえ・きよたか　南山大学）

♣